

『かなしみの人』(イザヤ書 53章1-12節) 2022.12.4.

<はじめに> クリスマスは救い主イエスの誕生を祝う時です。私たちは救い主をどのようなイメージで描くでしょうか。イザヤはイエスよりも 700 年以上前の時代の預言者です。彼が記した主のしもべの描写は、イエスの生涯を目撃して描いたと誤解されたほど正確な預言でした。

I しもべの風采(52:13-53:3)

①主のしもべ

イザヤ書後半(40-66章)に4か所「わたし(主)のしもべ」が描かれています。①42:1-4(性質)、②49:1-6(召し)、③50:4-9(働き)、④52:13-53:12(運命・生涯)です。後に、エチオピアの宦官は53:7-8を読んで、ピリポに誰のことなのかと尋ねています(使徒8:32-35)。

②気づかれない存在

しもべの顔だちは損なわれて人のようではなく(52:14)、その姿、出自や経歴にも人目を惹く輝きや見栄えもありません(53:2)。現にイエスの誕生の時も、ほとんどの人はそのことに気づいていません。クリスマスだからと、イエスに注目する人は今も稀でしょう。

③悲哀と病を知る(3)

悲しみの人は英訳で man of sorrows です。幾重もの悲哀を身に帯びていました。病は肉体、精神だけでなく、霊的なものも含み、その本質は「さまよい」「自分勝手」(6)です。その病を抱える人々(私たちも・3)から、彼は蔑まれ、尊ばれない仕打ちを受けます。

II しもべの死(4-9)

①肩代わりするしもべ(4-6)

イザヤは私たち人間の視点とは異なる、主の側から見たしもべ像を記します。私たちには彼は「神に罰せられ、打たれ、苦しめられた」と映った彼に、主は私たちの病・痛み(4)・咎(6)を肩代わりさせ、刺され砕かれることにより、私たちに平安と癒しが与えられたのです。

②取り去られるしもべ(7-9)

さまよい自分勝手に進む者たちに代わって、彼は無実であったのにその犠牲となります。彼は暴虐と法的裁きによって彼のいのちは取り去られ、悪人、富む者とともに墓に納められます。しかし、彼が人々の背きの身代わりとして、主が死に渡されたとは思いません。

③主の光に照らされて

これが主が送られた救い主の姿だと聖書は語りますが、私たち人間にはとても受け入れられません。期待する救い(主)像自体が歪み、自分本位、自分勝手だからです。主なる神の視点からの光に目を開くとき、自分の罪過ちとともに、救い主が見えてきます。

III 死を越えるしもべ(10-12)

①主のみこころ(10)

本章の「しかし」(5,6,10)は、主が解き明かされた真実の光です。しもべを代償死に渡すことを計画・実行されたのは主です。人が思い描かない姿で神が救い主を遣わされました。主のみこころは、大方人の思いとは異なり、へりくだって主に聞かなければ分かりません。

②満足するしもべ(11)

しもべは苦痛を感じないわけではありません。私たちと同じく、病も痛みもわかる方です。彼は死に渡された後に満足しています。死は終わりではなく、永遠に続くいのちがあります。主は彼を「正しいしもべ」と呼び、罪の代価が払われた故に罪赦され、義とされます。

③とりなしするしもべ(12)

「多くの人」が3回繰り返されています。しもべの死が自分の身代わりであったと受け取る者には、主はしもべと同様に永遠のいのちが与えられます。しもべはまだ背いている者たちのために、今もとりなし、呼び掛けています。それがクリスマスのグッドニュースです。

<おわりに> 日々の生活には悩み・問題課題が満ち満ちていますから、私たちは自分本位に救い(主)を求めます。聖書はそれでは救い主を見過ごしてしまう警戒とともに、見出せるようにと新しい光を与えています。この光に照らされ受け取るなら、救い主と出会えます(1)。(H.M.)